

追憶（我が人生）

和歌山県 林 三子雄

一、出生から入隊まで

大正十二年二月二十日

和歌山県日高郡竜神村広井原七五六番地

農業小川長五郎・長恵の二男に生まれる。

二、経歴

1 昭和四年四月より十二年三月まで

竜神村立竜神尋常高等小学校卒業

2 昭和十二年四月より十五年三月まで

和歌山県立熊野林業学校卒業

3 昭和十五年四月より九月まで

満州国錦州省立勸農模範場の研修生

4 昭和十五年十月より十九年三月まで満州国錦州

省吐默特在旗公署林業技術員として勤務し砂防

林造成に係わる

三、軍歴

1 昭和十九年三月二十日 現役兵として孫呉駐屯
野砲兵連隊第二中隊に入隊

2 昭和十九年五月 兵科幹部候補生合格

3 昭和十九年九月 保定予備士官学校入学

4 昭和二十年四月二十五日 保定予備士官学校第
十一期卒業し見習士官として関東軍へ配属され
る

5 昭和二十年四月二十八日 関東軍司令部へ出頭
し第三軍配属となる

6 昭和二十年四月三十日 野砲兵第百十二大隊第
三中隊付

7 昭和二十年六月一日 野砲兵第百十二連隊第九
中隊付に転属

8 昭和二十年六月下旬から八月六日まで第三大隊
長菅野大尉に随行陣地偵察斥候、琿春から間島
に到る幹線道沿線で対戦車陣地に適した地点を
抽出して作図した

9 昭和二十年七月から琿春後方大盤嶺山地の防衛
陣地構築のため部隊移動して露営しており、斥

候任務終了後は九中隊露営地で野宿する。

八月八日朝発熱三九度のため衛生兵に解熱剤の
注射を受けて解熱を待つが中々熱が下がらず、
一人壕で休養。食欲も無く力も抜けてふらふら
で衛生兵の看護を頼りにただ寝続けていた。

10 昭和二十年八月十四日大盤嶺内第九中隊陣地
内の一人壕内発熱、三九度超の高熱で悪寒に震
える。食欲もなく衛生兵に解熱剤の注射を受け
たが癒えず、八月十四日に到ってようやく食欲
を感じ夕食を摂って寝た。

11 昭和二十年八月十五日未明に命令伝達あり。昨
十四日ソ連軍が琿春へ侵入し我が陣地へ攻撃を
始めた。第一大隊正面の敵戦車隊と対戦中なれ
ど突破は時間の問題であり、急遽「小川見習士
官に第三大隊指揮班長を命ずる、直ちに第九中
隊の砲二門を誘導して密江峠の堀切りを正面に
据える陣地を確保せよ。細部の指示は連隊指揮
班長小野寺中尉に受けよ」と。時間は四時頃、
まだ明けきらない。慌てて跳ね起きる。腹ごし

らえもそこそこに愛馬にまたがり九中隊長に申
告した。出撃準備の整った第一小隊長の率いる
十榴二門と連隊指揮班長の指揮下に入り陣地確
保に出発した。朝日の昇る丘を駆け足で進んだ。

大盤嶺稜線上を降りながら進んでいる時、進行
方向にある谷間の資材集積所へ二機の飛行機が攻
撃しているのが眼下に見えた。低空から機銃射撃
を行っていたのが機首を挙げて丘をほう様に我々
の正面へ向って射ちながら頭上を越えて発射弾が
前方三十メートルと側方三メートルまで大きく土
煙を挙げて着弾した。高度五百メートルぐらいで
操縦者の顔も分かるぐらいの至近で撃たれるのだ
から最悪の事態、一撃即死だ。手綱を右に引こう
か左にか一瞬迷い振り向く、後続の部隊員に目を
向けたら黙々と続く隊列。臆する我が心を見抜か
れそう、青白んだ顔を正面に直して小野寺中尉に
並んで陣地予定丘の下の谷で下馬し、徒歩で急斜
面を登り目的地へ着く。続く砲兵は一門ごとにと曳
策と膂力で掛声を抑えて崖地を曳き揚げた丘鞍部

の岩棚に砲座を拵えて据え付ける。

目標の堀切と同標高で一発必殺の好位置を占めた。直距離七百メートル。偽装網へ木の枝を切つて挿したがたちまち萎れて白く光りだすので困つた。砲の据付終り通信班の電話布設が終つて昼食を済ます。

陣位置の対岸は密江峠の背後山で標高二三一メートルの大山で豆満江岸から立上がつて険しく、道路は密江峠の標高九〇メートルぐらいの堀切を越す一本のみで道から山頂へは友軍機動隊が入山して確保しているとの情報を信じていたし眼鏡に入るのは友軍兵なのに突然山頂からようやく設置した陣地の前面岩壁で砲弾が炸裂し煙硝臭が流れってくる。一発ごとに着弾が近接し危険を感じるようになったと思つた時、砲列を越えた一発が段列の谷間で炸裂し、馬二頭と兵二人が負傷したと報告が来た。どうやら二三一高地頂上はソ連空挺隊が進攻しているらしい。

午後一時頃第一大隊三中隊が我が陣の東隣に布

つけよ」と砕けた気分です十六日は整理の一日で休養した。

武装解除からソ連收容所へ

八月十七日は朝八時に連隊本部出発で琿春へ行軍する。連日の干天で道端の草も枯色になって道路の照り返しが朝から厳しかった。大盤嶺の陣地を出て密江峠の堀切りを越えたのは十時頃だった。

突然大きな大砲の筒口が現れる。一五センチ口径で砲身が六メートルぐらいで、これは加農砲といつて長射程砲だが、これを据え込んだ戦車がすごぶる巨大なのに目をみはった。これが噂のM四だろう、しかし終戦決定が一日遅れていたら昨十六日には九中隊二門とともに粉碎されていただろうと背筋が寒くなった。

動く要塞二台の砲身の下を潜るように進んで谷砦の山側広地へ携帯した小銃・帯剣・拳銃・双眼鏡等を積み重ねて捨てた。

将校の帯刀は許すというので外さなかった。乗馬はしばらく進んだ所で取られた。暑い行軍が続

陣しているはずなのに全然連絡がとれない。偵察斥候を出すと連隊本部付杉本見習士官と九中隊の上等兵二人を指名して、樹林伝いに午後一時から斥候に出発したが帰らず。

午後三時過ぎに連隊本部から電話連絡で「終戦のラジオ放送があつて、戦争を止めたから軍使が往復する。参謀長が琿春へ向かうから射撃を止めて待機せよ」と通達された。

午後四時頃陣地正面の街道を黒塗乗用車が白旗と参謀長旗を掲げて琿春方向へ進んだ。おおよそ二時間待つて軍使の帰還を見守つた。午後七時頃命令伝達あり「陣地はそのままとして人員撤収し連隊本部へ集結せよ」。

大砲弾薬を残して撤退し集結したところで連隊長より「本日正午終戦の詔勅が放送されて連合軍に無条件降伏をした。明後十七日朝八時に出発して琿春で武装解除を受けるから身の回りを整理して、食料と私物は必ず身に付けて持つこと。馬や車は取り上げられるから使えなくなる、充分気を

いて夕方六時頃琿春飛行場に集結した。どこに潜んでいたのか大した人数の集まりだ。行軍中前方から数回にわたり時計を隠せと伝言が流されてくる。伝言に付いてくるようにソ連兵数人が行列の両側から「チャスイ、チャスイ」と言いながら時計を探して、見つけ次第掠奪していた。一人で数個の時計を奪つて得意気に見せびらかしていた。この種の掠奪は列車輸送中も再三遭遇した。時計と万年筆、ブローチ、指輪が狙われた。

武装解除された部隊が飛行場の草原へ先着順に配置されてそれぞれ四列縦隊で座つていた。暗くなると四角に区切るように照明塔の光の壁を作つて囲い込んで警戒していたが、深夜十一時頃整備のソ連兵達のたまり場で昼間日本軍から取り上げた軍馬を集めて草原に放したらしく、何に驚いたか裸馬が二十頭ぐらい連れて駆け込んで来だした。

照明の壁を突つ切つて兵達の集合箇所へ向つて蹄の音高々に疾走して来るから一大事と「馬に踏まれるな」の大声で気付いた者が立ち上つて馬に

道を開くよう移動を始めた。馬は人間を踏むことはないのだが。

幸い我々の位置は、馬達の正面より外れていた。頭を少し高くして様子を眺めたら夜中で光の壁の外は分らない暗さの中慌てたソ連兵達が自動小銃の砲列を布いて中空へ向けて連続射撃を始めた。仰向いて空を見上げると銃口から赤い光の筋が次から次と糸を引くように出ている。三方向から射つので頭上で交叉する弾丸が線香花火を見ようだった。

射撃も三分か五分くらいで終結したが流弾被害者が多数発生した。自動小銃は発射弾数が多いが射程は短く最大で二百メートルだ、とにかく広場へ集めておいて三方から弾丸の雨を被せられたからたまらない。隣り合った一人が腹部盲管出血激しいので仮包帯して衛生班が救護所へ送り出した。

三大隊本部総員百三十五人いるというが、一昨日早朝転属を命ぜられて、陣地偵察に出たので戦

友も当番もない。部下となるべき者は四列に並んで座ったりしている。部下達と並んで座るのも顔を見るのも始めて、我は一人だけだから皆から「小川見習士官」と呼ばれるけれど、相手が誰か一々「お前は誰」と問いつながら班長や古参兵を見覚えるのにひと苦労だった。

飛行場の一夜で部下七人が救護所から入院した。戦闘が終って、もう死ななくてもいいようになってから流れ弾丸に当たるとは、全く運が良いのか、悪いのか、後になれば分かる。

飛行場で八日過ぎたが、その間四日目から携行食が欠乏して困るので通団本部へ陳情して飛行場脇の馬鈴薯を掘らせてもらい飢えを凌いだ。愛馬の鞍に装着したのが失敗だった。

八月二十五日移動開始して行軍始まる。

第一日は密江峠を越えて豆満江岸の河原泊まりだったが、翌朝は霜柱が六センチも立って一面雪かと見違える大霜で寒くてたまらない。

行軍中に道端の馬鈴薯畑を見付けては薯盗りを

して飢えを凌いだ。三日目の夕方金蒼駅裏の鉄条網で囲った草山へ追い込まれた。金蒼に移ってから給食制となつて自炊の必要はなくなったが、配給量が少く飯盒の掛蓋に八分目ぐらいの粥をもら

うだけで甚だひもじい。

九月一日に第十一期と第十二期の見習士官集合がかかり「八月十五日付けをもつて少尉に任官を伝える」と伝達され帰隊して申告した。

収容所は草地で屋根のある所がないから、寒さに凌ぎに堅穴を掘って穴居生活を始めた。食料の配給が少ないので空腹に耐えるのが辛い。夏衣の半袖姿での霜被りはこたえるから穴倉で背中を寄せて寒さ凌ぎの工夫したが終日穴の中に座って過した一カ月は苦しかった。死に損なった者の苦しみが始まった。便所の混雑にも閉口した。

九月末頃に作業大隊の編成が発表された。大隊長、中隊長、中隊付下士官、班長、班員の氏名が呼び上げられて、直ちに指名された者が整列、点呼のうえ出発した。

数日間隔で作業大隊三個出発した後は准士官以上の者と病弱者となった。

数日後に全員移動となり客車で延吉の病馬廠に移された。

ここは日本軍施設で居住に適しておるうえ収容数が少ないので楽に暮らせてほっと一息つけた。ここでは乾パン空き缶を拾い工作して飯盒代わりの食器と天幕布で背負袋を造って自分の物を身に付けられる工夫をした。これは武装解除の際に乗馬の鞍に装着していたため馬ごと奪われて不自由していたので後々大いに助けられた。

病馬廠の別棟に日本人婦人が数十人泊まっていたが、中に子供を亡くして宮庭の隅へ埋め、毎日泣きながら通って拌んでいたり、また営門の外から大声で「兵隊さん助けて下さい」と呼び掛けられるが何も出来なくて困る。声も掛けられず物陰に隠れた。警戒中のソ連兵が威嚇射撃をして追い払っていたが、無力の婦人達が子供連れで逃げ回っている姿が気の毒でならなかった。

十一月三十日に重病人を病院へ送り出して防寒外套、手袋、防寒靴、軍衣袴、下着類、すべて一装用に改めて集合。列車輸送で彈春下車したのが夜の十時頃だった。徒歩で国境越えにかかる。

国境越えは道のない山地を踏みしめながら歩いたが積雪五センチぐらいあって、雪明りを頼りに進んだが、登坂が急なため半歩半歩の歩みも後ずさりの方が多く、前後左右力を合わせて、押したり引っぱって登ったが、途中に倒れたまま固くなった兵の姿が幾体も見られた。

国境の丘を越えて下り次の丘へ登ったら稜線上に鉄道が敷かれていて、貨車が停まっているのが夜明けの明るさで目に入る。

先頭から四十人あてが一両ごとに押し込まれた車両は有蓋車で、牛馬輸送用のを入口引戸部分の中央へダルマストープ一基据付けて煙突は天井中央に立ててある。

両脇の袋室の部は高さ百二十センチぐらいに松板一寸厚ぐらいのを敷詰めてあり、上下二段の床

ら石炭を運び込んで火を絶やさず欧州まで運ばれた。

列車が停まると先ずレール脇へ屈んで排泄に並んだ。先行列車が何十本通ったか分からないが、レール脇へうずたかく凍った糞の量と風の吹くまま線路沿いに舞い狂う落とし紙嵐は奇観だ。輸送列車は走り出すと停まるのを忘れたごとく走り続けるので、給食受領が不定期になり腹を空かしっぱかりいた。

停車すると先ず引込線上の貨物列車の石炭積載車を捜して、ストープで燃やす量を確保するのに三人が専念したから、昼夜を問わずストープを真っ赤に燃やし続けて、ヤカンの湯も始終湯気を立てて車内の乾燥を防いだと思っていたが、車内湿度は壁へ霜柱となり、天井から氷柱が下がり、寝具毛布も氷で壁に張り付いて外れない状態になった。

十二月二十二日、冬至の日は、イルクーツク着で、昼十一時過ぎに暁闇から明るくなったが、午

にはあわわらを五センチぐらい厚に敷いてあった。

一段へ十人の割になるので、それぞれ荷物袋を枕にして進行方向横切る形で交互に五人あてが毛布を敷いて倒れ込み、隣の足を脇に抱えて場所取り終わったが、車内に採光窓は二階天井近く三十センチ角ぐらいの換気窓で外側へ押し上げて開くのが四個だけだ。暗い車内に各自の荷物を収めたところで「薪採り」の号令があり、線路脇の雑木林で生木を主に刀の試し切りをして薪を抱えて各車両へ戻った。

積雪は五センチぐらいだが、とにかく寒い。苦労してストープに薪を詰めて燃やし始めたが、うまく燃えてくれない。煙がいっぱい立ち込めて迷惑するので火を落として防寒衣を被って眠った。昨夜の行軍で疲れていたから良く眠れた。いつの間にか列車は疾走していた。

同乗四十人の中に奇しくも保定での同期生二人が押し込まれておったので力を合わせて三人でストープ番を志願して停車することに石炭輸送車か

後二時には闇の中へ吸い込まれた。

暗闇の中「入浴に行くから下衣から毛布も一切持つて集合」が掛かったので車両番を残して整列し、防寒外套の上から毛布二枚被って公設浴場に着くと、番号札二枚と鋼線の鉤付環が配られた。裸になって衣類全部鋼線で吊し、番号札一枚を衣服側、一枚を身に付けて、衣類束を熱気消毒室内の鉤に吊した。浴場はシャワー設備が整っていて、湯気でたちまち汗が噴き出すので国境越え以来のあかを落した。連続一時間を裸で温まって良い気分て浴場を出る。出口に陣取ったソ連の女医と二人の若者に腋毛と陰毛を剃り落とされて可愛くなった。熱気消毒で乾いた衣類は有難い事に車内に蔓延して困りもののシラミを退治してくれたから当分安眠できた。列車に戻って冷たい寢床に潜り込み、横臥して給食を待つてはその量の少なさに不服を言って、停車すれば競って排泄に走った。

鉄道線路上は積雪がほとんど無いが沿線風景は雪景色で一面銀世界だったが、暗夜続きで明るくな

る間が少ないので印象も少ない。

輸送中に一番困った事は列車給食であった。出発から二週間は油の浮いた米粥が少量あて配られたのへ「腹が減る」と不服たらた言い、次の週に大豆の固煮えが配られ、次の週は玉蜀黍粉のスープが続き、粟粥、高粱粥、金時豆汁、粉の粥も配られたのには閉口。消化不良、下痢に悩まされて弱り込む者が出た。

列車は一路西へ進んで二十一年正月四日の朝引込線の雪原に停まり、三十五日間の旅が終わり下車した。二枚の毛布を肩に掛けて、ぞろぞろと導かれてラーダ収容所に着いた。

有刺鉄線を厳重に張り巡らせた囲いの入口衛門で持参の軍刀へ所持者の所属氏名を記した付箋を付けて預け台へ載せてから丸腰で穴蔵式宿所に詰め込まれた。

宿所に割り当てられたのは半地下式で二段棚に仕切つてあるが、棚材は雑木枝条を並べただけへ持参の毛布を敷き、一枚を被つて、靴だけ脱いで

倒れて休む。

穴蔵式宿舎は入口に押し開きの二枚扉があり、常時は閉まるように自動復元装置で扉の表裏と把手の取付框は麻袋を覆つて防寒対策をしてある。

鉄類を直接触ると皮膚が破れる。一の扉を通つて二メートルぐらい進むと幅三メートルぐらいの通路は階段を降り八段進むと二メートルぐらい踊り場があつて、二番目の扉が同様式で据つており、扉の中は宿舎の床に連なっている。

一番扉を開けて階段にかかる頃異臭が漂つており息苦しくなつた。室内は暗く手探りだ。先住者はゲルマン捕虜との話だが、体臭か汗のにおいかな異様に鼻をつくので、この中に住み付くことかなわんと息をひそめて入つた。

室内の区画割りを受ける。老人を中の方へ、若く元気な者を入り口付近へ割り振つたから我等若人は入口正面の二階に決まる。

夕食を済ませて眠りにかかったが、入口の扉が静止することなく開閉して用便往復する数がおび

ただしい。夜が更けて冷え込みが強まると小便往來はますます頻度が上つて吹き込む風は白く霧となつて流れ込み、冷たいことこの上なし。よく冷えるから一時間も我慢出来ず小便に起き、冷えて

帰つて横臥しても暖まらず、直ぐに小便を催す悪循環に陥つて、身を縮め我慢したが大変疲れた。下痢患入院多数発生した。同朋十人のうち四人入院、二人死亡す。

午前七時、点呼の声で広場に並んで点呼と体操をする。未だ暗かったが広場には三十センチ以上雪が残つていたので総員で雪かきをして、広場の周りへ積み上げた。

以後毎日点呼・体操・掃除等雑務の割当が宿舍ごとに示されるが、若い者に、と数人の新米少尉が専属させられて不快が固まつてきた。

二月十日頃「近日伐採隊を募り百四十人編成で山へこもる。希望者は申し出るように」とふれがあつた。旧部隊別に収容されていて毎日指名されて出づつぱり状態なのに古参者が少しも動かない

現状に異を唱えようと思つていた同期の松永、牛島両少尉と申し合わせて伐採隊行きを志願した。

二十一年二月十五日頃の夜、緊急連絡として「本日国営農場へ行つた者の中に搾乳所で搾乳中の農婦に手持ちのコップを示して「これに一杯牛乳を売ってくれ」と頼む一中尉がいた。農婦が「駄目」と断つたら、中尉は「お金は持っている、一杯だけ飲ましてくれ」と押んで頼んだ。それでも牛乳はもらえず、うるさく付きまとうので仕事にならんと警備員に告げられた。警備員が中尉を連行して取り調べた結果、罪状は国有財産掠取教唆の現行犯であり「矯正労働十五年の刑」に決定し申し渡された上、即連行、収監されたとのことだ。

自由社会に馴れてきた我々は共産党の制度には分からない事ばかりだが、すべてが国有財産で個人は保管人でなければいけない原則があると覚えて、今後刑罰を受ける者を出さない注意を怠るな!!と。

ラーゲルより外出する機会のない我々には外部

の様子は分からないが、恐ろしい国に捕らえられたものだと思えた。

二十一年二月二十日伐採隊編成発表

隊長 小川工兵少佐以下百四十人

各班二十人の七個班編成となり、我ら三人は第六班で、班長・長谷川戦車中尉配下となる。

衛門を出てアメリカマシーナーと彼らが言う大型トラックに三十人ずつ詰め込んで現場宿舍まで二時間余りで到着した。

宿舍は一棟建ての木造板葺きで二段棚式は他と同じながら夏向き用の建物らしい。

中央通路二メートルぐらいで寝棚もそれぞれ二メートルぐらいで窓ガラスと裸電球も多く、ラーダの穴蔵と比べて格段に明るいので嬉しい。

伐採地へは徒歩で三十分ぐらい歩いた所で管理事務所から案内人が来て連れて行き、森の樹で伐る樹種と残す樹種の指導をして、現場で鋸斧を受け取って伐倒したら長さ二メートルに玉切り、一棚二メートル高に積み上げるのだが、鋸の使い方

にも工夫が要る。能率を上げるには大変な努力が必要だ。未熟者ほど力を入れた分成績が上がらず、くたびれもうけになる。

伐採隊の伐る樹は広葉樹で白樺、シナの木、槲、楓等伐跡で萌芽する樹だ。針葉樹は除く。三月中は時々降雪もあつて積雪三十センチぐらいの中で伐採木も根元が四十センチぐらいが主で、時々太いものを伐ることもあつてすべて薪用にトラックへ積み込んだが、伐倒は鋸使いに二人の気合いが合わないと思える割りに能率が上がらない。積み込み係は生木を扱うので重くて腕と腰に疲れが溜まって調子が悪くなるなど支障が出てきた。長谷川班長に昔早稲田のラグビー部で練習後にマッサージと指圧で疲労回復を図った経験の伝授を受けては体力回復に応用した。毎日作業終了後二人一組で相互に指圧の修業と治療に努めたお陰で指圧要領を会得した。

六月の暑い日曜日の夕方、宿舍横の堀川端で涼んでいた時「昔、慶応のボート部でイギリス遠征

をしてテムズ河でボート漕ぎをした後で食べた

フランス料理のフルコースは忘れられん思い出だ」と話していた男が急に「帰りたいよう」と大声を發し二度三度叫んだ。その後毎日夕方大叫びが続いた。皆が異常を感じて、どうなるのだろうかと思つて見守っていた。一カ月ぐらいで作業に出られないまで衰弱してきて病院送りとなつたが、ついに生還することが叶わなく、タタールの森に埋もれたと伝聞した。

春から夏へ季節が移ると薪伐りが減少して泥炭掘りが始められた。落ち葉の堆積した低湿沼で角スコを使って三十センチと六十センチぐらいの長方形の杭を掘り出して積み重ねて乾かすので伐木より疲労度が少なかった。

八月末で伐採隊を解散しラーダの穴蔵へ戻った。収容所内の人数が激減していた。皆が国営農場へ働きに行き、病人だけ残った。数日休んで農場手伝いに行き、未熟トマトを収穫して塩漬けをしたり、キャベツをコンクリート槽へ塩蔵する

のを応援した。

九月中旬に貨車で二日移動して下車し徒歩で六時間行軍して、エラブカ収容所へ入る。収容されたのは古い教会の大聖堂と思われる大きな塔の中で、寝棚は急ぎしらの雑木棚の二段造りだった。採暖はペーチカのようなだったが各部屋では焚かなかった。

到着の翌日から薪運び隊に出動した。大八車一台に八人掛かりで曳き綱を引き、十台縦一列で指揮者の号令で、往路は空車だから楽に進むが、帰りが大変。長さ四メートル、末口二十センチ程度、筏に組めない屑丸太を選び出しては大八車へ縛り付けて荷造りをするが、バランスが重要だった。荷造り上手な車は順調に帰るが、荷崩れする車は度々修復に時間を取られて隊列から遅れ、日が暮れて弱りきって帰ることが度々あつて、薪運びは重労働だった。

薪運びはラーゲルでなかった。街の主婦グループも同じ様に屑丸太を車に積んで同じ方向へ

運んでいるのに追い越されたり追い越したりした。彼女達はボリウムたっぷりの体格で行動も素早くキビキビとして働いていた。

おかしかったのは日本人が力をあわせるために掛ける掛け声の「エッサ、ホイサ」を聞きとがめるように「ヤボンスキーホイサ、ホイサ・ダ」と片腕の握り拳を固め、肘を曲げて体の正面で拳を上下に動かして見せ、皆一斉に「ホイサ・ホイサ」と言っただけで笑いして通り越したので説明は無かったが「ホイサ・ホイサ」は勢いを現す音らしい。

薪運びが雪の季節となつて大八車から木轎に変わった。雪道は歩行が安定できないから轎の操作が難しく転倒することが多く、打撲捻挫で故障者続出して就労可能者が減少し、元気な者は連続勤務が続いて弱り込んだ。

二十二年三月、身体検査で、痩せ過ぎだが働き過ぎで無病の判定を受け、二週間の間休息の家で静養が与えられた。三十八キログラムが休養二週間で四十二キログラムに戻った。冬期は日照時間

が短いのと寒さの厳しさで体力消耗が甚だしかった。

朝八時は真つ暗闇だ。先頭が松明をかざして出発する。続く轎列は次々数珠繋ぎに十数台続いた。薪材を受け取る場所は八キロから十二キロぐらい先の工場だ。丘を幾つも越えて運ぶ作業は重労働だった。昼間の明るい間に荷造りを終るが帰途はたちまち薄暗くなり、前の轎引きの掛け声を頼りに雪道を歩くが雪の固まった筋を外れると大変な労力と時間を費やして苦しみ大騒ぎだ。前轎に遅れないよう「エッサ、ホイサ」を続けてはい込むように戻り着く。吐く息は白く、たちまち防寒帽の垂れの毛皮に凍りつき、防寒外套の中では汗が凍って固まってくる。ようやく一日の作業を終えて夕食の分配を受ける。ジャガイモを煮つぶして透き通ったカーシャと呼んでいる薯蕷炊を一リットル缶に一杯もらう。温かいうちに一気にすうすうで終る。毎日の給食はカーシャ七〇〇グラムぐらい、作業特配付で一リットルぐらいをも

らって過ごしたが、いつも空腹であった。

二十二年四月二十五日にボルガ河の川開きを見る。朝から飛行機がしきりに舞い飛んでいて、昼頃には収容所横の河が氷結していたので爆弾投下が始まり、たちまち川面を覆っている氷を砕いたから黒ずんだ水が大量に流れ出て川原一面に広がり、大洪水が始まった。

翌日朝からボルガ河を遡上する大型外輪船が続いて汽笛を鳴らして行くのを眺めては、この船が下ると海に出る、海は日本海へも通じるだろうと推測して故郷が恋しい。

五月一日メーデーを祝う催しがあつてから移動させられた。今度はボルガ河の外輪船で河下り。四時間ぐらいで下船し、収容されたのはカザンの波止場に近い収容所で百五十人が入った。建物はようやく建てたばかりで仕上がってなかったから石灰汁を壁に塗ったり寝台を整えたり炊事用釜等調度品の整理をして、石灰臭の部屋は南京虫や虱の煩わしさなし。工場内の清掃等々各種作業に出

たが、深夜の飛び入りでの貨車積みや荷卸しは時間限定で三時間激働は体力消耗が甚だしかった。中でも新築建物の塗装準備作業で内壁と天井の塗り下のササラ打ちは細い板が扱いづらい。天井へは金槌で釘を打ち上げるから首も手も非常に疲れた。天井の隙間ばかり見つめていて足場を踏み外して転落、足場板へ胸骨が掛かって止まったから良かったが、肋骨四本骨折し内側へ畳む負傷に呼吸動作も辛いが二週間の作業休と絆創膏テープングをしたのみ。静養を申し渡されただけで鎮痛剤はくれなかったから、怪我の晩から一週間ぐらいは起居振る舞いが制約され大いに苦しんだ。

怪我が恢復すると炊事係に指名されて勤務に着いた。朝は午前三時に起きて馬鈴薯粥を仕込んだ大釜の座った窯の火入れをして、薯釜が沸き出すと焦げ付かせないため釜底を木製オールで常時掻き回すのが新入りの役目で、調味から配給は先任が当る。釜掃除、粥桶の清掃から室内外清掃で夜九時頃まで立ち尽くすので足が疲れる。それでも

寒風に曝されての所外作業より体力消耗は少ない。

二十三年六月一日、急に移動準備が伝えられ、直ちに装具を担いで貨車に乗せられた。

収容所長の中尉と女医も同行で「ダモイ」列車が東方へ出発した。警備兵も十数人同行。沿線は初夏の青草が美しく、所々芍薬の株に大輪の花が咲き誇っているのが清らかに眺められるのが嬉しかった。

バイカル湖風景は緑の山肌を青い湖に映して湖畔を一日中巡っていて雄大さを誇っていた。往きに見た氷壁の輝く壮麗さとの違いの大きさに感動した素晴らしい眺望だ。冬の闇世界苦行の三十五日行程を十五日でナホトカ着、下車して幕舎に収容された。

検査、調査、雑役、清掃作業等移動する度に腕を組んで合唱しながら元氣そうに示威した。民主化不足と査定されて作業隊に戻されたグループがあると噂されたり、個人的に中傷されて乗船できなく残留してラーゲルで世話している等噂に振り

での昼食は銀シャリ飯に焼き魚、味噌汁付きは夢の中にいる気分だった。シベリアへ戻される心配がないので船内では安心して眠れた。

二十三年七月二日 帰還

舞鶴港の引揚棧橋、到着したらDDTで消毒。

棧橋へは氏名を大書した幟を押し立てて『この者の消息を知る人はいませんか』と数十人が出迎えてくれたが知人はいなかった。引揚援護局の宿舎に入って先ず入浴で、大浴槽に浸るのは三年ぶりだ。あか落としを入念に磨くので小一時間浴場で過した。

復員手続きの聞き取りが行われた。GHQでは収容所での作業成績が良く『休息の家』に収容されたことのあるスペシャリストとして取り調べられたらしく、復員後も役場の旧兵事係や駐在巡査の戸別訪問があり、一方日本共産党の地区委員等の来訪頻繁。

帰国後の生活

本籍地へ戻って父母に寄宿し、その間に就職活

回されて、隣人がどここの出身者か分からない急編成のグループなので、たまたま名字が同じ者同士を並べただけで古い付き合いがないから素性はお互い知る由がなく全く知らない。しかし乗船を目前にして残され組には入りたくないのが全員の願望であり、優先で乗船するため同僚の悪口を作り話にしてささやく、いわゆるささやき作戦で敗れた者が奥地へ逆送された例が沢山あるらしい。噂は立てない、立てられないよう隣同士気を付けて、行動は機敏にして合唱は元氣良く振舞えとの伝達があり、移動するときはスクラムを組んで必ず合唱した。

二十三年六月三十日朝八時頃乗船者名簿の発表があるので集合せよと通達があり、幕舎から出て集合していると、カザンから同行の所長中尉殿が名簿の読み上げをして一人ごとに確認し、乗船用の歩み板を踏んで英彦丸の甲板へ歩を運んだ。この感激が最高だった。三年の長期間ジャガイモ粥ばっかりのひもじい思いにお別れじやと、英彦丸

動の一助にと林業技術普及員の資格試験に合格。地域での伐木造材実技習得のため実兄の指導を受けながら山仕事に従事し生活費稼ぎをした。

昭和二十八年一月二十六日 結婚

縁あって上山路村東一三四八番地林文子と結婚。入籍し林家の農林業経営を継承。保温折衷苗代を導入する等、改良に取り組む。

二十八年七月十八日 未曾有の集中豪雨あり、田畑道路流出甚だしく、山林崩壊も甚大であった。丁度竜神村長小川長五郎と議会議長小川信一郎の両名が有田郡清水町へ連絡道路の促進交渉に出張中、音信不通となったため大層心配した。搜索隊を出すにも荒廢甚だしく交通路通信共途絶、先方から連絡の来るのを待つのみ。有田郡花崗村や清水町の被害は非常に大きな被害で人的損失甚大。ヘリコプターで直視調査に赴く状況だった。宿泊中の旅館が流されたが両人は県庁への便宜を求めて上県し知事に被害見聞した状況報告し、緊急支援米救援の手配をして七日後に帰村した。一方村

内全戸動員して道路の流失箇所へ応急措置をして小型自動車の通行できる努力したり、救援米の運搬に出役する等、災害対策に忙しかった。竜神、上山路、中山路、下山路の四カ村は日高川沿いながら今回の水害で対岸へ渡れる橋がほとんど無くなり、応急架橋に各集落は奉仕活動に明け暮れた。秋の取り入れが終った頃から、竜神村役場に測量のできる職員が不在のため、農地の復旧計画策定が遅れて困る、応援してくれと要請あり、思案に暮れたが応諾した。

昭和二十九年一月 竜神村臨時職員に就く。

昭和三十年三月一日 市町村合併で四カ村が合併して新「竜神村」となり、引き続き勤務した。土木・振興・産業・農林・林業の各課を経て参事・検査員で停年となる。

昭和五十五年六月三十日 竜神村職員を退職

昭和五十三年六月 全抑協和歌山県連合会日高第一支部結成し支部長に選ばれた

昭和五十六年五月二十五日 竜神村森林組合代

受け止めてくれる力のない世の中が歯痒い。

【執筆者の紹介】

出生

大正十二年二月二十日 和歌山県日高郡竜神村
農業小川長五郎・長恵の二男
に生れる

就学

昭和十二年三月 竜神村立竜神尋常高等小学校
卒業

昭和十五年三月 和歌山県立熊野林業学校卒業
昭和十五年四月～十九年三月 満州国錦州省吐
默特在旗公署林業技術員

兵役

昭和十九年三月二十日 現役兵として孫呉駐屯
野砲連隊第二中隊に入隊 幹
部候補生に合格
昭和十九年九月～二十年四月 保定陸軍予備
士官学校卒業し見習士官

表監事に選任された

平成十年三月二十二日 会長橋本義治氏没のため全抑協和歌山県連合会長に選任された

平成十年五月二十五日 竜神村森林組合代表監事を解任（膝疾患のため）

平成十年五月二十五日 財団法人全国強制抑留者協会理事に補充された

平成十七年五月二十五日 財団法人全国強制抑留者協会理事解任

平成十七年七月二十日 全抑協和歌山県連合会長留任

戦後六十年を経て戦中戦後青春時代に享けた試練を乗り越え八十歳を刻んで過ぎ得たのは少年時代窮乏生活で肉体を絞って鍛えられた恩恵と感謝せねばならん。

しかしシベリア抑留は敗戦の償いと課せられるべきでなかったらと思う。

満州での棄民シベリア抑留者と遺族のやるせない憤りをどこへ打ちつけようか。

昭和二十年五月 独立野砲兵第一百十二大隊第三中隊付

昭和二十年六月 野砲兵第一百十二連隊第九中隊付見習士官

昭和二十年八月十五日 終戦により少尉任官武装解除

昭和二十年八月十七日 琿春飛行場集結 金蒼収容所で作業大隊を三個送り出す

ソ連抑留から復員

昭和二十年十一月三十日 延吉病馬廠から琿春へ列車送の後、徒歩で国境を越えてシベリア鉄道で三十五日間の貨車詰めてラード収容所へ

昭和二十一年三月 伐採隊へ参加六カ月
昭和二十一年九月 エラブカ収容所へ移る
昭和二十二年五月 カザン作業隊へ派遣
昭和二十三年六月 ナホトカ収容所へ移る

昭和二十三年六月三十日 英彦丸乗船

昭和二十三年七月二日 舞鶴上陸復員

復員後の状況

父母の家に戻って一年間静養寄食しながら、兄久男に随って伐木採寸剥皮寸検山出しの技術を習うと共に生活費を稼ぐ

結婚・改姓・就職

昭和二十八年一月二十六日 仲人松本豊三郎・コマエゴ夫妻の御媒酌にて、上山路村 林正信・コマノの長女文子と結婚し、林三子雄となる。

昭和二十八年七月十八日未明から有田日高大水害発生し地域内の被害甚大

昭和二十九年一月 竜神村役場へ臨時雇人

昭和三十年三月一日四ヶ村合併「竜神村」誕生

昭和三十四年四月 竜神村技術職員に採用

昭和五十五年六月 停年退職

老後の奉公

昭和五十三年六月 全抑協和歌山県連合会日高

第一支部結成し支部長就任

昭和五十六年五月 竜神村森林組合代表監事に推選さる

平成十年五月 竜神村森林組合代表監事解任

平成十年五月 財団法人全国強制抑留者協会理事に補充された

平成十七年五月 財団法人全国強制抑留者協会理事を解任

平成十七年七月二十日 全抑協和歌山県連合会会長留任

資性温厚よく奉仕の心を保ち地域の役職にも推され、篤実に責務を果し人望篤い。

全抑協会長も無償奉仕を永年保続して会員の面倒をみている健康人である。

(和歌山県 古久保 秀夫)